

医療介護福祉政策研究フォーラム
第47回月例社会保障研究会

2017.5.19

看護のアジェンダ

－ 政策の到達地点 －

井部俊子（聖路加国際大学名誉教授）
（井部看護管理研究所代表）



「井部さんの看護のアジェンダ、面白いね。
毎回、楽しみ」というナースの声をよく聞いた。
それは師長さんであったり、主任さんであったり、
大学の先生であったり、あるいは現場の
若いナースだったりした。医師のファンも多い。
「カンゴ、カンゴしてないのがいいよね」医師た
ちはそんなふうにした。

11年間1回も休まず連載を続けることは、井部さんご自身もおっしゃっているように“ あっぱれな ” ことだと思う。規則正しい生活のリズムに連載執筆を組み込む勤勉さと、何より「看護に対する静かで温かいなにか」がズーっと継続していることのすごさに圧倒されながら一気に読み切った。

(エキスパートナーズ編集部 有賀洋文)



看護のアジェンダ

井部俊子 著

医学書院

定価 2,500円+税

評者のメッセージ①

川嶋みどり先生

11年の長期連載で、年次別に並ぶ133の目次はあまりにも多彩であり、それらに含まれているアジェンダがそれぞれ自己主張をしているようでもある。

初期に書かれたものでも歳月の隔たりを感じさせないほど新鮮なのは、提起された問題の本質は今なお継続していることを示している。看護管理と看護教育の面での含蓄のある記述もさることながら、いわゆる一般教養的な話題は、著者の人生観が反映していて実に興味深い。

とりわけ、実際の入院体験や患者体験を取り上げた項は、『**清水さんの入院経験**』 92- (2012/12) では、「医師が患者の見方ではなくなることがあることや、看護師の身体ケアがいかに患者を活気づけ尊厳を守るかを、清水さんの入院経験に伴走することで再認識した」と。

また、『**駒野レポートー病の克服**』 94- (2013/2) では、病室の個室化により若い看護師たちが先輩の優れたわざを盗む機会を奪い、看護の熟度が上がり質に影響しているとか、国際的なJCI受審のための種々の変更が、機材、人材を伴わないため看護サービスのレベルダウンに通じるなど、近代化や国際化に翻弄される看護の姿を、入院したジャーナリストの目から看護のアジェンダとして紹介している。

この他、『**こんなことが起こっています**』 103-
(2013/11)、『**人が患者になるとき、患者が人になるとき**』 127- (2015/11)、『**患者に寄り添わない会話**』
131- (2016/3) など、何れもリアリティにとんだ現場の状況を患者目線で述べられている。

これらの数篇の体験談の底流には、母上の臨終に駆けつけた娘としての著者の悲しみと、追慕の情の一方で抜けきらない職業的習性を客観視する、『**母の最後の日**』 44- (2008/7) があり、同体験をしたものとしての涙を誘われた。

また、看護の社会的有用性を示すための看護師自身の説明責任の必要という点からも、看護を語ることの意味と、それを文章で表現することの大切さは論をまたない。

この点に関しては、『**文体の魅力**』 28- (2007/4)、『**看護の語りかた**』 40- (2008/5)、『**Professional Writing再び**』 69- (2011/1)、『**文体のレッスン**』 124- (2015/8)、『**トピック・センテンス**』 125- (2015/9)で取り上げられている。

研修会や講習会で自身の実践体験を生き生きと語った看護師が、同じ内容を文字にする段になると、専門用語を羅列して精彩を欠くといったことは珍しくない。

「日常の言葉を使って書いたり話したりすることの出来なくなった人は、はっきり考える力そのものを失う」とは、鶴見俊輔の言葉であるが、その意味からも、肩を張らず日常の語り口で書かれている本書は、「看護を書く」という面からも学ぶことが多くあった。

評者のメッセージ②

村上靖彦先生（大阪大学）

医療者ではない評者が一読した時の驚きは話題の多様さにある。患者の体験、看護の実践、看護師の教育、マネジメント、法改正、日本の看護制度の歴史、海外での医療の動向、文章の書き方、そして著者自身の母の看取りにいたる主題は多岐にわたる。

そして例にとられるトピックも映画や村上春樹のエッセイ、著者自身が見聞きした伝聞、さまざまな統計資料や法律の文言といった広がりをもつ。

こうして看護師というメチエの広がりとお行きと複雑さを読者は一望することになる。133本のテキストが織りなす織物ゆえに、ミクロの視点から俯瞰する視点にいたる多様な切り口で、本書は看護の世界とその魅力を巨大なプリズムとして描き出している。

おそらく看護の外にいる人たちは看護がこのような多面的な職務であることを知らないし、これを描き出すことができるのは著者を置いて他にはないのであろう。

そして多様な話題を辿ることで、逆に著者が一貫した主張を持っていることにも気づく。

患者の尊厳を中心にして看護を考える事、
そして一人ひとりの看護師が自発的に考え
実践していくこと、この二点について看護師を励ますために本書は書かれている。

これは著者自身が本書を通して実践してきた営みでもある。そして本書において何よりも魅力的なのは、著者が自分で見聞きした出来事を描写する場面である。ミクロな視点が巨視的な知性に支えられそれが「自分の言葉」になっていることがわかるのだ。

最後に私が気に入った一説を引用したい。被災地にはためく洗濯物に、日常の回復を感じる描写に続く場面である。

「洗濯物の記憶」(2011年3月)



看護のアジェンダ111回 洗濯物の記憶、https://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03069_05 (2017年3月1日)

評者のメッセージ③

山口俊晴先生（公益財団法人がん研究会有明病院）

本書では医療界に内在する複雑でナイーブな問題が、あたかもそれがあぶり出されるように、平明な言葉で書かれている。

おだやかな書きぶりではあるが、その文脈の中には強いメッセージが隠されており、読み終わったときにしばしば深い余韻を残す。それは読者のものの見方や感じ方を、時にはすっかり変えてしまうことさえあるほどインパクトの強いものである。

私にとって特に印象深かったのは、『**母の最後の日**』44-（2008/9）と論考『**迷惑な夫たち**』88-（2012/8）であった。

『**母の最後の日**』では、私も今春母を喪ったばかりなので、著者の悲しみがよりいっそう心にしみみした。

また、論考『**迷惑な夫たち**』は現場で起きている事象に対する、著者の感性豊かな切り口と考察が、読後にいろいろなことを考えさせて、ある意味で本書の特徴が最もよく表れている作品の一つである。

番外編

看護の危機への憂慮

『**入院時のチェック**』136- (2016/4) に追われる

看護師

『**本当の看護をもとめて**』149- (2017/5)

手遅れになる前に

ご清聴ありがとうございました。

